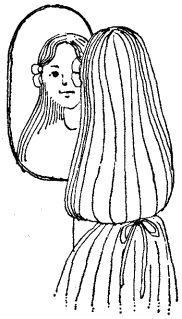
私の保育

――春に想うこと――



江口明子

子どもたちは、すでに春を感じ始めている。手や足をぐうんと伸ばして、そう、心の中で眠っていたものを発散させるかのように、園庭にとび出していく。

いつも友だちの後をくっついてばかりいるN男が、頬を紅潮させて私を呼びにきた。

「先生、きてよ。早く。」

「どうしたの？」

「いいからきてよ。早く、早く。」

N男に呼ばれたことがうれしかった。彼の迫力に圧倒され、また、わくわくしながらついていった。

N男は、水仙の芽を指さしていた。細長い花壇に、水仙の芽が三つほど出ていたのだ。

N男は、うれしくてしかたがないかのように、かがみこんで水仙の芽を見ている。

「先生、冬と春とがかわりばんこしたよ、冬が土の中に入って、かわりに春が『次はぼくの番だよ』って出てき

たんだね。」

ぱっと顔をあげたN男がまぶしかった。

ああ、もう一年が過ぎ去ってしまった……。何と表現したらよいのだろう。もの悲しいような、それでいてうれしいような、複雑な想いがこみあげてくる。

春を迎えて……年中組三十四名の担任になってからの一年が脳裏に甦ってくる。

元気に遊んでいる、あの子どもたちの姿に一年前の姿をダブらせながら……。

K男はいばった顔で、友だちに何やら命令している。初めての集団生活になじめなくて泣いてばかりいた。大きな体を小さくして、私の背後に隠れるようにしていたK男が印象に残っている。

M子は砂遊びをいやがった。砂をさわることがきらいだった、友だちに誘われてしかたなく砂いじりをしたときも、まるで汚ないものをつまむようなしぐさで砂をつかんだ。

今、M子は砂山にトンネルをほり、じょうろで水を流している。登園してすぐに砂場へ出てからずっと……。夢中になって遊んでいる。砂と水と太陽と子ども……特別相性が良いと思う。

Y男は相変わらず荒っぽい。が本当はとてもやさしいのだ。てれやだから、つい反対の行動をとってしまう。仲良しのKをかばおうとして、Sの作った剣を折ってしまい、みんなに批難されたときはかわいそうだった。Sの剣を折ったことはいけないことだけれど、Kのために必死になったY男がいじらしかった。

Aが友だちに呼ばれてふり返ったとき、机上のクレヨンが床に落ちてしまった。ふと横を通ったSが、クレヨンを一本ずつ拾い上げ始めた。AはSとほとんど話をしたことがなかったので、しばらくぼかんとしていたが、Sが最後のクレヨンを拾ったとき、

「ありがと。」

とそっと言った。

ささいなできごとではあるけれども、何気なくクレヨ

ンを拾ってあげたSのやさしさや、感謝の気持ちを、はっきり相手に伝えたAの行動は、けっして見のがせない、貴重なものだと思う。

いつも後になってはっとするのだが、貴重な場面を見のがさずにきただろうか。はなはだあやしい。全身を目、耳にして、子どもたち一人一人に接したいと思いつつ、その難しさに毎日悩まされる。

I子にしても、ひざの上で本を読んであげるまで、こんなに甘えたがり、安定したがっているとは思わなかった。しっかりした口調で話し、てきぱきと行動するI子…彼女の一面しか見ていなかったことに驚き、反省させられたのである。

Tとはうまくかかわれなかった。どのように接したらよいのかわからず、迷った。友だちができず、私ともしっくりいかなくて、Tはさびしかったと思う。粗暴やいたずらをしかってしまってから後悔をくり返した私だった。彼のさびしさをわかってあげずに、彼の行動だけを見ていたような気がする。

ある日、ドアを閉めようとして、Tは自分の指をはさんでしまった。保育室が割れんばかりの声でTは泣いた。私はTが泣くのを初めて見た。みんなもびっくりしてTを見つめていた、すると、Tは私を即座にさがして、私に抱きついて泣きじゃくった。何も難しいことではないのだ。Tをこんなふうに抱きあげることがどうしてできなかったのだろう。

人間がかかわり合うということは、理くつではなく、ことばを超えたものだ、とそのとき思った。確かに、理くつや秩序やことばは必要である。現に人間の結びつきを強くしてくれる、が、それだけでは成り立たない。

S子には本当に悩まされた。三学期の最後になって、登園拒否が続いた。家庭の事情も原因の一つになっていたかと思われるが、毎朝、きょうはきてくれるかしらと待っているのはつらかった。きょうはだめかな、と思っていると、十分ほど遅刻してS子がくる。そしてやや明るい表情で降園したな、と思って喜んでいると、次の日の朝は玄関で大泣きしているのだ。

やっと泣かずに登園し、友だちの中に入って、大好きなままごと遊びをし始めたな、また、なわとびにも意欲がでてきたな、と思ったら春休み……。新学期はどうかしら、心配は消えない。

一月に妹ができたE子はどうしているかな、妹が産まれる前は、姉になることを喜んでいたE子だったのに、産まれてからは、赤ちゃんのようになってしまった。園でも、私から離れない時期があった。私の身体のどこかにつかまっていないと不安のようだった。小柄なわりに体重が重いE子をおぶって、保育室と園庭を往復したっけ。

春休みに、うんと甘えて、また元気なE子になってほしいな。

一人一人について書いていったら、いつ終わるかわからなくなりそうである。クラス全体を見て「このクラスはこんなクラスである」と一言ではいえない。他のクラスの先生から、〜な感じのクラスという表現で言っていただくことはあっても、私にとって大切なのは一人一人であって、クラス一まとまりをことばで表わすことは難しすぎる。

ただ、特に思うことは、クラスの子どもたちはみな動物が大変好きで、動物を主人公にした遊びをよくしていたことだ。

たとえば、ペンギンのぬいぐるみを中心にしたごっこ遊びは、ほとんど全員が経験したのではないだろうか。

朝登園したら、ペンギンのとり合いである。ペンギンのぬいぐるみを持つことができなかったので、ティッシュ入れのペンギンで遊んでいた子どもたちも多かった、ぬいぐるみは悲惨である。手がとれたり、口ばしがほつれてきたり、足がはずれたり。

手あかがついて真黒になったペンギンをおふろに入れたいというので、お湯を洗面器に入れ、石けんとスポンジを用意した。

大喜びでペンギンをきれいに洗ったのはよいのだが、中のわたが水分をすって、ペンギンのお腹がふくらんで

しまった。

タオルでふいてかわかしたが、ペンちゃんの肥満は今だに続いている。首も短くなり、安定が悪いので立つのもやっとだ。様変わりしたペンちゃんを、子どもたちは相も変わらずかわいがっている。降園の前には、ままごとのふとんを敷き、ペンちゃんを寝かしてから帰ることが多い。

また、自分がペンギンになりきることもある。ダンボール箱に穴をあけ、首、手足を箱から出してヨチヨチ歩く。どの子どもも、ペンギンになっているときは楽しそうだ。

Nは、絵をかくことを好まなかった。ほとんど自由画を描かない。手先は器用なのだが描くことに自信がないらしい。自分が思っているものを描けないことが、絵から遠ざかってしまう原因のようだ。

それが、ある日横向きのペンギンを初めてかいた。大きな画用紙に豆つぶのように小さなペンギンだったが、とてもかわいらしく愛敬がある。彼自身、満足いくものだったらしく、目をキラキラさせて私に見せにきた。

「もっと大きくかいたらいいのに。」

ということばをあわててのみこんで、私は、

「わっ、かわいいペンちゃん。」

と言った。彼は

「ぼくのペンちゃんだよ。」

とうれしそうに言い、友だちに見せて回った。

与えられたものではなく、本当に好きなものなら、子どもは自然に描こうとするのではないだろうか。

春をむかえて、過ぎ去った一年をふり返りながら思いつくままに書いてしまった。

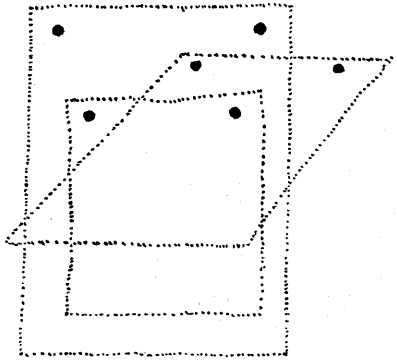
毎日毎日がとても重いものなのだとつくづく思う。子どもの成長力はすばらしいものだ。

ぼんやりしているひまはない。私がぼうっとしている間に、彼らはどんどん伸びていってしまうからだ。

失敗しては後悔し、反省する。そしてまた期待と不安の入り混じった明日をむかえようとする。これでよいの

かと常に疑問をいだきながら、本音でぶつかっていかねばならない。

保育とはなんと難しいものなのだろう。と言いつつも、私の心は、新しい春をむかえて、また子どもたちと共にする生活を楽しみにしている。

子どもたちは、すでに春を感じ始めている。手や足をぐうんと伸ばして、そう、心の中で眠っているものを発散させるかのように……。

（東京・大和郷幼稚園）